第12回 はがきの名文コンクール

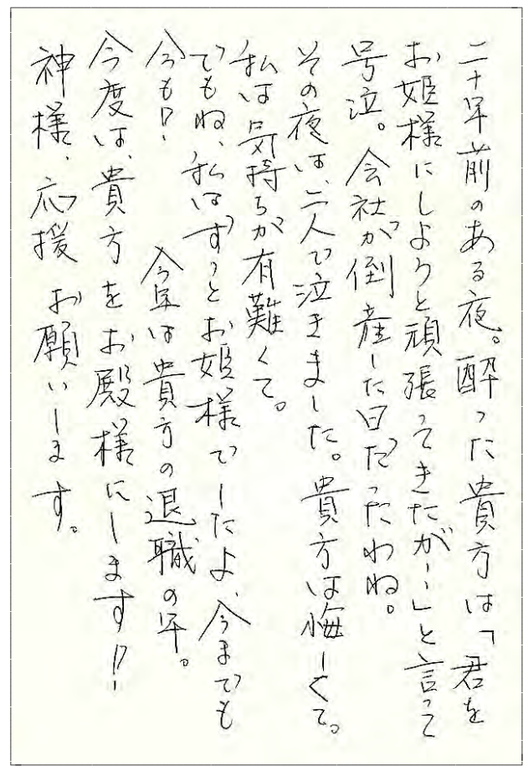
つづる いま伝えたい思い

「一言の願い」をテーマに200字以内で願い事をつづる「はがきの名文コンクール」。12回目の今回は約1万4千通の作品が寄せられ、受賞作が決まりました。主な受賞者と受賞作を紹介します。

ずっと敬愛するあなたへ



【大賞】小峯真理子さん(72) 埼玉



出会いは、大学のクラブだった。「この人と結婚する」。先輩の誠さんを一目見て、直感じ」。その一回が、はがきに書いたあの晩だった。「誠実で、私にはもったいない男性。本当に敬愛しています」

その後、誠さんは以前の部下とともに新しい会社を作った。真理子さんも、学校で簿記を学び、会社の一員になった。

時は過ぎ、仕事から徐々に引退。のんびり過ごせるようになった。一緒に散歩をして、ワインを飲み、おいしいものを食べる。「こういう毎日が続いていくとうれしいね」と2人で話す。

来年は金婚式。記念になればとはがきに思いをしたためた。誠さんには「あなたのことを書いたのよ」とだけ伝えた。「普段はダジャレを言い合っているから、恥ずかしくて」。新聞に載るまで、誠さんにはがきは見せない。

五木寛之さん　当事者の人生の重みもあるけれど、この明るさがいい。短いはがきの中に、夢やメルヘンのようなものが織り込まれている。今のメディアの欠けているところを補ってくれているような作品だ。

運転士の仕事 なくならないで



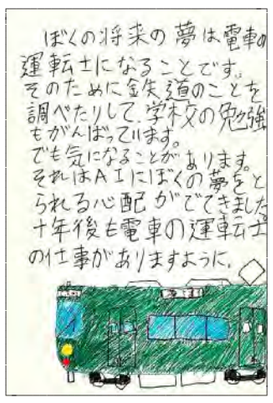
【五木寛之賞】福井佑智さん(10) 滋賀

電車は「1歳からずっと好き」。お母さんと近くの線路沿いを歩いたり、ラッピング電車と写真を撮ったりしているうちに興味を持った。電車のおもちゃでよく遊んだ。

ビデオカメラでの撮影も始めた。電車の一番前の車両に乗って、運転士の目線のように線路をうつすのが好きだ。自分のSDカードは去年の誕生日に買ってもらった。

電車の運転士になることが夢だが、最近気がかりなことがある。小学校ではタブレットを使って学び、プレゼン資料をAI(人工知能)で作ったこともある。「最近AIがすごくなってきている」と感じる。鉄道図鑑を読み、自動運転の電車があることは知っていた。AIがもっと発達したら……と考えた。「自分のしたい仕事がなくなるっていうのは嫌だから、はがきに書いた」

はがきには、かつてJR草津線を走っていた電車の絵も添えた。図鑑を見なくても描くことができる。ずっと親しんできたこんな電車をいつか運転したい。夢がかなうことを祈りながら、今は勉強を頑張っている。



五木寛之さん　子どもの夢は大きくてほのぼのするものだけれど、ついにAIとの折り合いについて書かれた作品が出てきた。今の文明が直面している大問題が、さりげなく織り込まれていることにちょっと驚いた。

夢でもう一度 手をつなぎたい



【村山由佳賞】佐藤泰子さん(64) 秋田

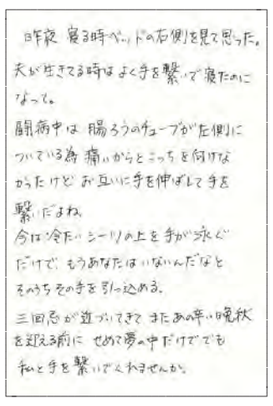
高校1年生のとき、山岳部の県大会に参加した。「かっこいいな」。手伝いに来ていた山岳会の九つ年上の澄夫さんにひそかに思いを寄せた。

それから数年。短大卒業後、ショウブ園でアルバイトをしていると、澄夫さんが現れた。周りの人が取り持ってくれ、交際に発展した。

結婚して、3人の子どもを育てた。澄夫さんが役所を退職すると、旅行に行った。久々に一緒に山にも登った。うれしかった。これから一緒にゆっくり過ごせると思っていた。だが、澄夫さんに食道がんが見つかった。澄夫さんは、3年の闘病の末に旅立った。

寂しいのでなるべく澄夫さんのことは考えないようにしているが——。一緒に寝ていたベッドで手を伸ばすと、そこに澄夫さんはいない。「なんでそっちにいったの」と思う。

コンテストの告知を見た前の晩も、そんなふうにしていた。はがきに向き合うと、思い出があふれ出した。にやにやしたり、泣いたりしながら、書き上げた。27日が命日だ。夢の中で、もう一度手をつなぎたい。



村山由佳さん　生活が困窮するわけではないが、癒えない悲しみの中にいる。「夢の中だけでも私と手をつないで」という、ものすごく切実な思いが届いた。気持ちを救ってあげたいような気がした。

101歳 体に溜まる時間の重さ



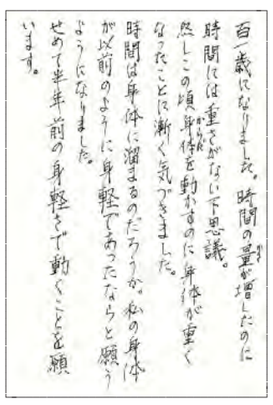
【斎藤孝賞】谷本周枝さん(101) 東京

100歳になった時、ある短歌をつくった。「人生100年時代というけれど、それは軽々しいことではない」。終戦時は20歳だった。「いつどこでどんなことが起きるか分からない。それを免れて今の100歳というものがある」という思いを込めたものだった。

101歳で残した短歌は、江戸時代の歌人・良寛の句「散る桜 残る桜も 散る桜」を引いたもの。桜の季節に「私もいつかは散る桜になるんだ」と感慨を覚えることを歌った。

「時間」について深く考えるようになった。そんな短歌での表現を改めてはがきにしたためてみた。時間は身体に溜まるのだろうか——。

「今まで小走りの生活だったのに、もうすたたというわけにはいきません」。生活には困っていない。台所に立ち、本や新聞を読み、趣味の短歌をつくる。幸せな日常の中で、身体の変化を感じている。去年登った小さな山に今年は行っていない。せめて、半年前の身軽さで動けたら。願いをそっと記した。



斎藤孝さん　哲学的で知性を感じた。時間のカサは増しても、時間に重さはない。だが100歳前後になって時間の重さについて、身体感覚としての気づきを得た。「半年前の身軽さ」も含め興味深い。

言葉にする大切さ 選考委員講評

選考委員は、作家の五木寛之さんと、作家の村山由佳さん、明治大教授の斎藤孝さんが務めた。

五木さんは「この国は、自分の思いをかみしめて内側に秘めるという伝統があるが、自分の思いを短い文章でも言葉にすることが、いま大事なことなのではないか」と語った。

村山さんは「はがきから、SNSよりもはるかに日本の形が見えてくる。皆さんが本当はどういうことに興味を持ち、苦しんだり喜んだりしているのか、興味深く読ませてもらった」と選考を振り返った。



選考委員を務めた(左から)斎藤孝さん、五木寛之さん、村山由佳さん

斎藤さんは、はがきについて「距離感や時間がゆっくり流れる感覚を味わえるところが魅力。自分の感覚や考えを確かめながら書き記す時間はとても豊かなもの」と話した。

奈良で来年1月贈呈式

来年1月16日、奈良県御所市のアザレアホールで、受賞者を招いて記念品贈呈式が行われます。近くには、本コンクールの宛先になっている「郵便名柄館」があり、大正期に建てられたかつての郵便局舎は、資料館とカフェを併設した場所として親しまれています。

■その他の受賞者(敬称略)

【日本郵便大賞】
水木菜々美(山口県)、三村泰輝(埼玉県)、松山則子(東京都)、知念修一(新潟県)、道野康幸(北海道)、佐藤一世(秋田県)、松原加代子(大分県)

【ゆうちょ銀行大賞】
徳渕誠也(和歌山県)、遠藤悠真(福島県)、柚場隼人(京都府)、粕谷浩子(埼玉県)、徳永智美(兵庫県)、小笠原友子(岩手県)、宿谷ひろみ(東京都)

【かんぽ生命大賞】
横山ウィリアム龍(沖縄県)、土谷嵐馬(兵庫県)、佐藤青(東京都)、石澤里美(東京都)、大内梢(静岡県)、岩渕良子(青森県)、鈴木久美子(山形県)

〈主催〉はがきの名文コンクール実行委員会　〈協力〉日本郵便、ゆうちょ銀行、かんぽ生命、奈良県御所市、堺屋記念財団　〈後援〉文部科学省、総務省、朝日新聞社

◇受賞作品はホームページ(https://www.hagaki-meibun.or.jp)にも掲載されています。　◇この特集は、堀越理菜が担当しました。

